

研究主題・副題

## 伝え合う力を育てる国語科の授業

### ～五つの言語意識を大切にしたい単元構想と評価のあり方～

要約：伝え合う力を育てるために、五つの言語意識を位置づけた単元構想と評価のあり方について、授業実践を通して考察した。その結果、学年の発達段階に応じて、五つの言語意識の中で重視したい言語意識を考えた単元をいくつか構想し、子どもの実態に合ったもので授業することで、伝え合う力が育っていくと分かった。また、評価のあり方としては、評価の観点や「ものさし」を、教師と子どもが共有していくことが重要であると分かった。

キーワード： 伝え合う力 五つの言語意識 単元構想 評価の「ものさし」の共有

#### ・主題・副題設定の理由

現代の子どもたちの言葉に関する問題点として、「仲間同士のおしゃべりはできるが、人前では、聞き手を意識した話が、なかなかできない」「書くことに対する苦手意識が強い」などがあげられている。また、これまでの学習をふりかえると、単に話し方や書き方の技術の習得や一方通行的な発信に終わってしまい、伝え合う場面や状況の少ない学習になりがちであった。こうした状況を踏まえ、これからの国語科の授業は、具体的に伝え合う相手がいて双方向的な学びの場がある授業にしていく必要があると考える。

伝え合う力を育成していくためには、子ども自身がもっと学びの相手や目的を強く意識した学習の展開が望まれる。つまり、子どもの生活の実態に即して、言葉の学習にかかわる「五つの言語意識」を活性化していくようにしなければならない。本研究では、「五つの言語意識」について自分なりにとらえ、単元計画や本時の学習に位置づけて指導していくことが、伝え合う力を育成することにつながっていくと考える。また、指導と評価の一体化をめざして、どのような評価をしていくことが必要なのか探っていきたいと考え、本主題・副題を設定した。

#### ・研究の目的

国語科の授業の中で、伝え合う力を育てるため、「五つの言語意識」の位置づけを大切にしたい単元構想と評価のあり方について探ることを目的とする。

#### ・研究の方法

1. 「伝え合う力」をどうとらえるか、参考文献をもとにして考察し、自分なりの見解をもつ。
2. 「五つの言語意識」について分析し、学習指導要領の〔目標〕や〔内容〕における言語意識について領域ごとに考察する。さらに、「伝え合う力」とのかかわりを自分なりにとらえる。
3. 「伝え合う力」を育てるために、具体的な評価方法を探る。
4. 「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域の2つの授業実践を行い、単元や本時における「五つの言語意識」の位置づけと、評価のあり方について、それぞれ考察をする。
5. 「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域において、「五つの言語意識」の系統性と効果的な評価のポイント例を考察し、まとめる。

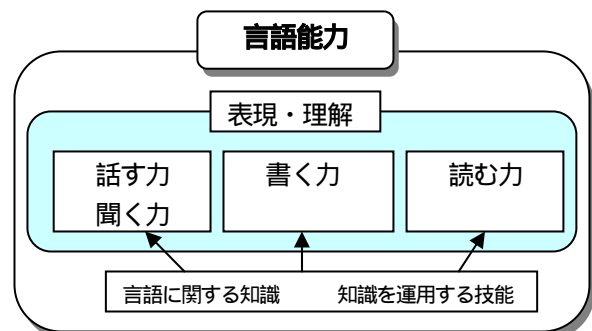
#### ・研究の結果と考察

##### 1. 伝え合う力のとらえ

人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする言語能力である。人間形成上きわめて大切な人間関係力をも含むものである。

また、言語能力の詳しいとらえについては、次のように考え図式化した。(図表1)

図表1 言語能力のとらえ



## 2. 五つの言語意識と伝え合う力のかかわり

### 五つの言語意識とは

自分にとっての相手意識  
 ( を受けて)自分にとっての目的意識  
 ( を受けて)自分にとっての場面や状況, 条件意識  
 ( を受けて)自分が意図的, 計画的に活用するための表現や理解の方法意識  
 ( を受けて)自分の表現行為や理解行為を自己評価する評価意識 (小森 茂氏による)

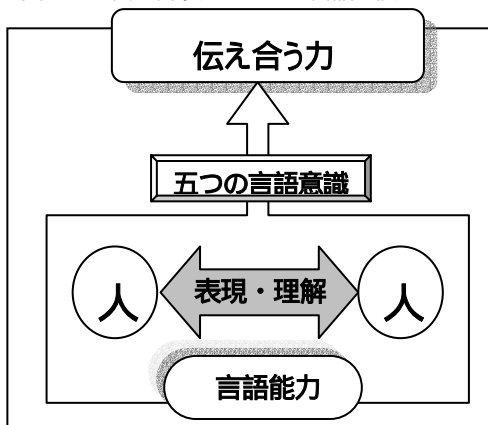
言語意識については, 学習指導要領でも, 低学年 中学年 高学年と学年段階と領域内容に応じながら, 「相手」「目的」「場面」などのそれぞれの意識にかかわる学習が, 螺旋的に積み重ねられ高められるように配慮され, その重視が明確に示されている。また, 「五つの言語意識」は, 子どもたちが言語活動をふりかえる時の観点となる。

本研究では, 相手や目的, 場面・状況に応じて, 自分の考えを話したり聞いたり, 書いたりすることで, 人間関係力をも含む言語能力が育成されていくと考える。つまり, 「五つの言語意識」を単元や本時に位置づけていくことで, 伝え合う力が育成されていくのである。

この「伝え合う力」と「五つの言語意識」とのかかわりを図式化すると, 次のようになる。

(図表 2)

図表 2 伝え合う力と五つの言語意識のかかわり



## 3. 伝え合う力を育てるための評価方法

### (1) ワークシートや単元ミニ通知表による評価

自分の学びを意識化するため, ワークシートや単元ミニ通知表などにより自己評価や相互評価を

していく場を効果的に取り入れ, 自分の言語活動をふりかえるようにする。

### (2) 評価観点の明確化

自己評価や相互評価をする際, 評価の観点を明確にしておくことが大切である。観点がはっきりしていないと, 「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習では, いつも「声の大きさ」や「文字の間違い」など, 評価内容が浅く学習のめあてから離れた観点になりがちである。

### (3) 評価観点における言語意識の位置づけ

評価観点に, 「誰に」「何のために」「何を」「どのように」伝えるのかなどの言語意識を位置づけることで, 適切に表現できたか正確に理解できたかという言語能力をふりかえるようにする。このことが, 伝え合う力を育成することにつながる。

## 4. 実践の結果と考察

### (1) 実践 「話すこと・聞くこと」編

#### 第2学年 「紹介したいな おすすめの本」

自分のおすすめの本について, 「誰に」「どんな目的で」「どのように」紹介するのか意識させ, 1年生に分かりやすく伝える中で「伝え合う力」を育てようとした単元である。本単元では, 図表3のように「五つの言語意識」を位置づけた。そして, 子どもが相手意識・目的意識を持って意図的に学習ができるように, 本の紹介をお願いする手紙をもらうという「教師の仕掛け」から学習をスタートさせた。また, 評価の新しい方法として, 「単元ミニ通知表」で, 自分の学びを意識化していくようにした。さらに, 単元ミニ通知表の評価観点には, 「五つの言語意識」が位置づくようにした。

図表 3 本単元における「五つの言語意識」の位置づけ

言語意識	子どもの意識
相手意識	まだ図書の借出をしていない1年生
目的意識	自分たちのおすすめの本を1年生にわかりやすく紹介するため <b>教師の仕掛け</b>
場面・状況意識	多目的活動室(図書室)でペアになって紹介
方法意識	実際に本をもって紹介する あらすじを紹介する ペーパーサートで おすすめのを伝える
評価意識	紹介の仕方をお互いにアドバイスし合う 自分の紹介の仕方をふりかえる 本単元での学びをふりかえる

## 考察

### 単元や本時における「五つの言語意識」の位置づけについて

- 子どもたちにとって、相手意識や目的意識が明確で、しかも必然性のあるものであれば、それに従って方法意識や場面・状況意識も出てくる。
- 「伝え合い」の学習には、相手意識や目的意識につながる「教師の仕掛け」が必要である。

#### <課題>

- 学年の発達段階に応じて言語意識の系統性や段階を加味した単元構想をいくつか探ってみることで、子どもの実態に合った単元を具体的に考え、伝え合う力を育成していく必要がある。

### つけたい力にせまるための評価のあり方について

- ワークシートを活用することで、子ども自身が学習内容をふりかえったり、紹介の内容を整理したりしていくことができた。「話すこと・聞くこと」においても、書くことを通して自分の学びを意識化していくことが必要である。
- 「伝え合う」ということから、評価観点を明確にして、話し手・聞き手の双方で言語活動をふりかえることが必要である。(図表4)

図表4 本の紹介本番後のアンケート項目

2年	1年
ペアの子の名前、おすすめした本の名前	紹介してもらった本の題名
本の紹介をはっきりとした声で言えましたか	お話が、よく聞こえましたか
1年生が喜んでくれたと思いますか	おすすめの本を読みたいくなりましたか
1年生にわかりやすく話すことが、できましたか	2年生の言っていることが、よくわかりましたか

- 単元ミニ通知表では、「五つの言語意識」や評価規準を評価観点として位置づけたが、その内容は、子どもに分かりやすいものにすることが重要である。

#### <課題>

- 本実践では、教師と子どもの評価の結果に大きなズレがあった。その理由として、評価の「ものさし」が曖昧だったことが考えられる。評価の観点を具体化し、子どもと教師の評価の「ものさし」を共有させていく必要がある。

これまで述べてきた2つの課題を生かして、「書くこと」の授業実践をしていくことにした。

## (2)実践 「書くこと」編

### 第5学年「教えます！これが自慢の弥生十景」

学校のホームページにも紹介されている「弥生十景」を題材にして、6年生に紹介するために、分かりやすいパンフレットを書くことをねらった単元である。本実践では、「五つの言語意識」の中でも、何を重視するのか考えて3つの単元を構想した。そして、その中の子どもの実態に合った単元(「方法意識」と「評価意識」を重視)で実践し、伝え合う力を育てるようにした。授業における子どもの言語意識は、図表5のようになった。

図表5 本単元における「五つの言語意識」の位置づけ

言語意識	子どもの意識
相手意識	弥生十景を知らない6年生に
目的意識	卒業するまでに弥生十景を知ってもらおう
場面・状況意識	6年生にパンフレットを読んでもらう 実際に、その場所に行き紹介する
方法意識	パンフレットで弥生十景を伝える グループで分担してパンフレットを作る
評価意識	分かりやすいパンフレットにするために クラスで高め合っていく <b>重視</b>

「伝え合う力」を育てる評価のあり方として、次の2点を重視した。

- 子ども同士のかかわり合いを大切にし、よりよい表現を求めてクラスの中でも伝え合う力が、育っていくような評価をしていく。
- 単元ミニ通知表で自己評価する際、子どもと教師の評価の「ものさし」を共有できるように、資料を配布し共通理解をした。(図表6)

図表6 評価の「ものさし」の例

学びの様子	評価のものさし
パンフレットの文章の一文が、長々と書いてあったり短すぎたりせず、自分のことばで6年生に伝わるようにまとめている。	何を書いているのか、分かりやすい。資料をそのまま写して書かず、自分のことばで書いている。 文章の長さに気をつけむずかしいことばを使わないでまとめている文章が分かりにくかったり、資料をそのまま写したりしている。

## 考察

### 単元や本時における「五つの言語意識」の位置づけについて

- ・本単元では、「五つの言語意識」の中でも、特に「方法意識」「評価意識」を重視した。その結果、方法意識に合った相手意識・目的意識が生まれ、さらに、どのように書くと相手によく伝わるのかという、より具体的な方法意識も生まれてきた。
  - ・この具体的な方法意識が、子どもの評価の観点となっていった。よって、方法意識と評価意識を重視したことで、子どもたちは主体的な言語活動を行うことができたと言える。
- ### つけたい力にせまるための評価のあり方について
- ・子ども同士のかかわり合いを大切にし、よりよい表現を求めていく力を育てるためにも、下書き段階での相互評価が効果的である。
  - ・つけたい力に即して、評価の「ものさし」を具体的に示し、子どもと教師が評価の「ものさし」を共有していくことで効果的な評価となった。
  - ・評価の「ものさし」が質的なものと量的なものになっている場合、指導と評価の一体化ということを考えると、量的なもので評価する場合があってもよい。

## 5. 「五つの言語意識」の系統性

授業実践を通して、「五つの言語意識」の系統性を自分なりにとらえ直し、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域ごとにまとめた。以下、「話すこと・聞くこと」における「五つの言語意識」の系統性（自分なりのとらえ）を示す。（図表7）

図表7 五つの言語意識の系統性 自分なりのとらえ

発達段階に応じて意識させたい言語意識  
学習指導要領に示されている言語意識

学年	相手	目的	場面・状況	方法	評価
1 学年					
2 学年					
3 学年					
4 学年					
5 学年					
6 学年					

## 効果的な評価のポイント例

「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域における効果的な評価のポイント例を、それぞれ学習の場面ごとにまとめてみた。「話すこと・聞くこと」の例を、図表8で示す。

図表8 「話すこと・聞くこと」編 評価のポイント例

練習したことを友達に聞いてもらいアドバイスし合うことでよりよいものにしていく場

子どもによる評価	教師による評価
<b>ペアによる相互評価</b> ・誰とアドバイスし合うのか、ペアをはっきりさせておく（グループでアドバイスし合うより、一対一の方が効果的である） <b>アドバイス観点の明確化</b> ・アドバイスし合う時は、アドバイスの観点をはっきりさせておく	<b>支援が必要なペアの把握</b> ・特に支援が必要なペアを事前に把握し、そのペアを中心にアドバイスし合う様子を記録したり支援したりする（TTなども有効に活用する） <b>ビデオの活用</b> ・活動の様子をビデオに撮り、評価に生かしていく

## ・結論

本研究の結果、伝え合う力を育てる国語科の授業について以下のことが明らかになった。

### 1. 「五つの言語意識」の位置づけを大切にした単元構想について

- ・単元や本時に「五つの言語意識」を明確に位置づけ、具体的に子どもに意識づけていくことが重要である。
- ・学年の発達段階に応じていくつかの言語意識を重視した単元構想をし、子どもの実態に合った単元を具体的に考えていくことで、伝え合う力が育っていく。

### 2. 伝え合う力を育てるための評価のあり方について

- ・評価の観点を具体化し、教師と子どもが評価の観点や「ものさし」を共有化することが重要である。つけたい力に即して、評価の「ものさし」を具体的に示していくことで効果的な評価となる。
- ・単元ミニ通知表などにより、子どもが単元における学びをふりかえり、学びを意識化していくことの積み重ねが重要である。
- ・友達同士でアドバイスし合ったり、よいところを見つけ合ったりしながら高め合っていくような相互評価をしていくことで、伝え合う力が育っていく。